南砺市埋蔵文化財調査報告書 26

富山県南砺市

院林遺跡Ⅳ

—主要地方道砺波福光線道路改良事業に
伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(4)—

2009年3月

南砺市教育委員会

南砺市埋蔵文化財調査報告書 26

富山県南砺市

院林遺跡Ⅳ

―主要地方道砺波福光線道路改良事業に
伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(4)―

2009年3月

南砺市教育委員会

院林遺跡　５地区（北から）

院林遺跡　５地区（西から）

序

南砺市は、富山県の南西部に位置し、市内にはユネスコ世界遺産に登録された五箇山の合掌造り集落を代表として、数々の文化財が残されています。中でも埋蔵文化財については、分布調査や試掘調査によって、旧石器時代から近世に至る様々な時代の遺跡が市内に数多く残されていることが分かっています。近年の開発行為に伴って、大規模な発掘調査も行われ、多くの掘立柱建物や竪穴住居跡、石器や土器、陶磁器などが見つかりました。

今年度は、主要地方道砺波福光線改良工事に先立って、院林遺跡と寺家廃寺跡の発掘調査を実施しました。本書はその調査成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明に活用していただければ幸いです。この調査の実施にあたり、富山県土木部、南砺市シルバー人材センター、地元院林地区、寺家地区の皆様には多大な協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成２１年３月

南砺市教育委員会
教育長　浅田　茂

例　言

1　本書は主要地方道磐梯猪苗代線道路改良事業に伴う院林遺跡の発掘調査概要である。

2　調査は富山県土木部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。現地調査及び報告書作成については、南砺市教育委員会の管理の下、株式会社アーキジオが実施した。調査面積は1,155㎡である。

3　調査事務局は南砺市教育委員会文化課におき、文化財係長北島清、文化財保護主事片田亜紀が調査事務を担当し、文化課長吉田鈴代が総括した。現地調査および報告書作成は株式会社アーキジオ阿部将樹が担当した。

4　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏の協力、助言を頂いた。記して謝意を表する。
梅本建設工業(株)　金道武史（有）清水重雄　久田正弘　森田秀一　吉田清次（五十音順　敬省略）

5　本書で使用した方位は真北である。また、標高は海抜高である。土色、土器胎土色の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』(2004年版)による

6　調査参加者は以下の通りである。(五十音順　敬省略)
新井利信・荒川剛志・石田哲雄・笠谷晃・紺井茂・関根一貴・中村公治・林憲彦・舟木雄大・水牧憲二・袋口和弘
宮崎光子・柳沢政勝（現地作業員）　佐野睦美（現地補助員）
真田恭子・佐野睦美・新保利恵・高橋英史子・新田三喜子・橋寅理子・畑シノブ・水巻麻里・宮口美香（整理作業員）

7　本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱを片田、Ⅲ～Ⅳを阿部が執筆し、全体の編集は阿部が担当した。

目　次

Ⅰ　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第1図　院林遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・ 1
Ⅱ　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・ 2
第1表　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・ 2
第2図　院林遺跡5地区の位置・・・・・・・ 3
Ⅲ　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
1　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第3図　院林遺跡5地区　調査区割図・・・・ 4
第4図　院林遺跡5地区　平面図・・・・・・ 5
2　院林遺跡5地区の概要・・・・・・・・・・ 7
（1）地形と基本層序・・・・・・・・・・・・ 7
第5図　院林遺跡5地区の基本層序・・・・・ 7
（2）遺構の概要・・・・・・・・・・・・・・ 7
（3）遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・ 9
Ⅳ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第6図　院林遺跡1～5地区　寺家廃寺跡
1・2地区の主な遺構・・・・・・・ 11
第7図　院林遺跡5地区の遺構（1）・・・・・ 12
第8図　院林遺跡5地区の遺構（2）・・・・・ 13
第9図　院林遺跡5地区の遺構（3）・・・・・ 14
第10図　院林遺跡5地区の遺構（4）・・・・ 15
第11図　院林遺跡5地区の遺構（5）・・・・ 16
第12図　院林遺跡5地区の遺構（6）・・・・ 17
第13図　院林遺跡5地区の遺物（1）・・・・ 18
第14図　院林遺跡5地区の遺物（2）・・・・ 19
第2表　院林遺跡5地区　掘立柱建物(SB)計測表 20
第3表　院林遺跡5地区　溝(SD)計測表・・・ 20
第4表　院林遺跡5地区　土坑(SK・SX)計測表・ 20
第5表　院林遺跡5地区　土器計測表・・・・ 21
第6表　院林遺跡5地区　石器計測表・・・・ 21
写真図版1
写真図版2
写真図版3
写真図版4
写真図版5
写真図版6
写真図版7
報告書抄録

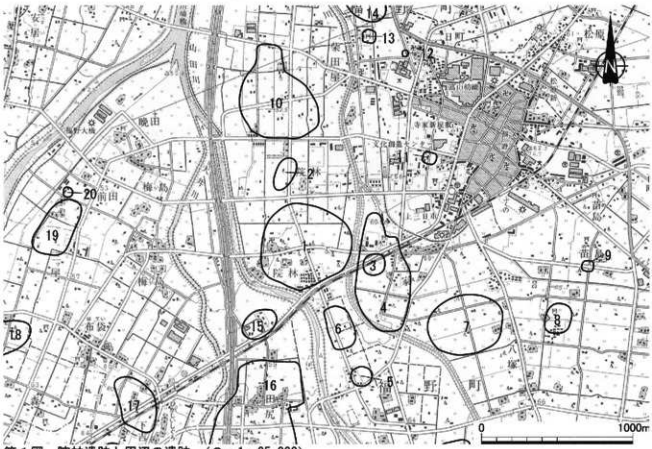
Ⅰ　位置と環境

富山県の南東部に位置する南砺市は、2004年11月に町村合併で成立した市であり、西を石川県金沢市、白山市、東を富山市、北を小矢部市と砺波市に接する。旧井波町と旧城端町は門前町として、旧福野町と旧福光町は市場町として栄え、人口の大半は平野部に集中している。

地形的には、呉羽丘陵、蟹谷丘陵といった低丘陵と、険しい山々が連なる飛騨山地に囲まれ、平野部は庄川と小矢部川によって形成された複合扇状地が広がる。庄川は旧荘川村の山中峠の湿原を水源とし、全長は約115kmで、日本でも最大級の庄川扇状地を形成している。小矢部川は庄川扇状地の勢いに押されて、砺波平野の西端部をゆるやかに流れ、庄川の排水河川の役割も果たしている。この一帯は屋敷林に囲まれた農家が水田の中に点在する散村景観が広がり、西日本の平野部に認められる環濠集落に代表される集村景観と対比され、全国的にも有名である。

院林遺跡は、南砺市の北部、旧福野町内の大字「院林」と「寺家」地内に所在する。小矢部川の支流である旅川と白田川に挟まれた標高56～58mを測る段丘の縁辺部に立地する。史料によると、この辺りは古くから集落が成立し11世紀後半頃には院林郷が成立した。院林郷の地頭職は度々の停止、安堵を繰り返し、院林氏により世襲された時期もあったと考えられる。しかし14世紀を最後に院林氏の名は文献史料では確認できず、この後没落していったと考えられる。

また寺家廃寺跡は院林遺跡の旅川を挟んだ東側に隣接する。寺家地区の日吉社に側柱礎石、水田に塔心礎と考えられる礎石が残っている。それぞれ、「夫婦岩（要岩）」、「皇孫塚（鏡石）」と呼ばれ、市の文化財に指定されている。寺院に関しての記録はないが、礎石の型式や周辺の採集遺物から平安時代頃が建立時期と考えられる。



第1図　院林遺跡と周辺の遺跡　（S＝1：25,000）

1.院林遺跡 2.院林北遺跡 3.寺家廃寺跡 4.寺家遺跡 5.広安北1遺跡 6.広安北2遺跡 7.八塚遺跡 8.八塚神明社遺跡
9.苗島神明社遺跡 10.柴田屋川西遺跡 11.寺家新屋敷館跡 12.礼拝塚 13.柴田屋館跡 14.柴田屋北浦遺跡
15.田尻北遺跡 16.田尻遺跡 17.下吉江遺跡 18.桐木遺跡 19.前田遺跡 20前田館跡

Ⅱ　調査に到る経緯と経過

主要地方道砺波福光線波は、富山県西部の砺波市、南砺市福野、福光の中心市街地を結び、国道156号と国道304号を連絡する総延長約12.8kmの幹線道路である。また、北陸自動車道の砺波ICと東海北陸自動車道の福光ICへのアクセス道路となっている。しかし、幅員狭小で慢性的な渋滞があり、歩道を整備し歩行者の安全を確保する等の面から、早急に整備することが求められ、順次改良工事が行われている。寺家地区から田尻地区の区間1.4Kmでは平成12年に都市計画がなされた。この区間には住宅密集地があり、南にJR城端線が並行して走っているため現位置での拡幅余裕がなく、新たに北側に幅20mの道路を建設するものである。その後平成14年には事業採択がなされ調査、設計、用地交渉などが始められた。

バイパスルート上には、周知の遺跡として寺家遺跡、寺家廃寺跡、院林遺跡、田尻北遺跡が存在する。しかし、道路起点と終点位置の制約などによって路線位置はおのずと決定され、遺跡を回避する事は不可能であったため、遺跡の保護策については記録保存対応とならざるを得なかった。

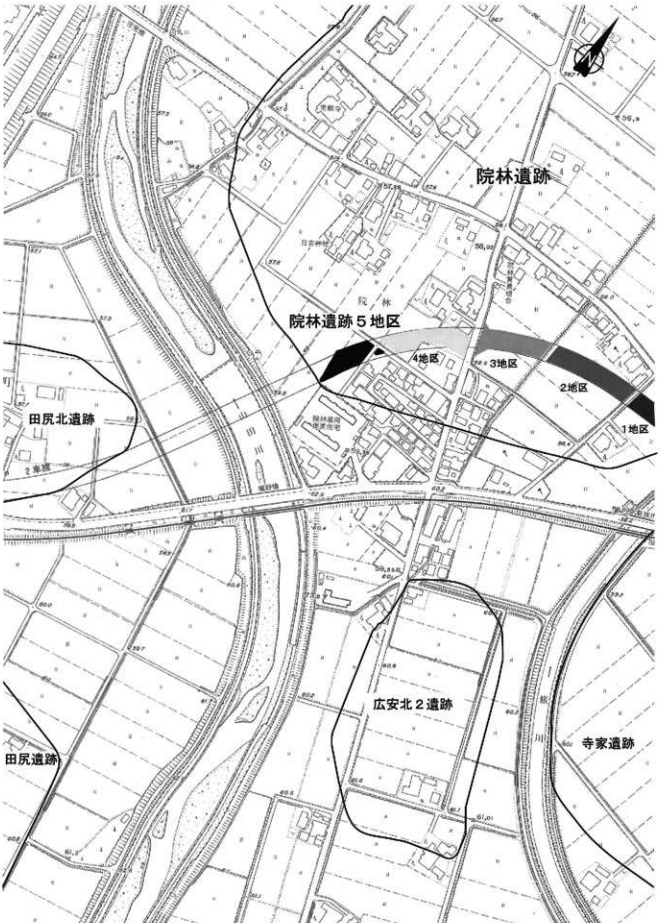
平成16年3月、当時の福野町教育委員会は富山県の依頼を受け、道路用地買収を完了した寺家遺跡の一部で、また平成17年9月には、南砺市教育委員会が旅川以西の延長400mの区間、院林遺跡で試掘調査を実施し、対象区域の全域にわたって古代～中世の遺構・遺物が存在することを確認した。これらの調査結果を受け、富山県と南砺市の間で協議し、路線内の遺跡が遺存している箇所について、本調査を行うことになった。以降、試掘調査と並行して平成18年3月から本調査をおこなっている。なお平成19年には田尻北遺跡の路線内の試掘調査を実施したが、遺構は確認しなかった。

本調査面積は、次のとおりである。

平成18年度	院林遺跡1地区、2地区	4,300㎡	（民間調査会社へ委託）
平成19年度	院林遺跡3地区	1,560㎡	（南砺市教育委員会直営調査）
	寺家廃寺跡1地区	1,460㎡	（　〃　）
平成20年度	寺家廃寺跡2地区	376㎡	（民間調査会社へ委託）
	院林遺跡4地区	1,955㎡	（　〃　）
	院林遺跡5地区	1,155㎡	（　〃　）

第1表　遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
院林遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、掘立柱建物、柵跡、井戸、土坑、溝、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、珠洲、白磁、青磁、越中瀬戸、伊万里、肥前、土錘、円面硯、ふいごの羽口、打製石斧、砥石、石鏃、銅銭、下駄、刀子、鉄滓
寺家廃寺跡	古代	礎石、柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器、珠洲、越前、白磁、青磁、瀬戸美濃、ふいごの羽口、円石、石鉢、石臼、五輪塔、櫛、漆器、瓦出
寺家遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居？、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師器、珠洲、近世陶磁
田尻北遺跡	古代、中世、近世	竪穴住居、土坑、柱穴、溝	土師器、須恵器、珠洲、近世陶磁



第２図　院林遺跡５地区の位置（Ｓ＝１：４,０００）

Ⅲ　調査の概要

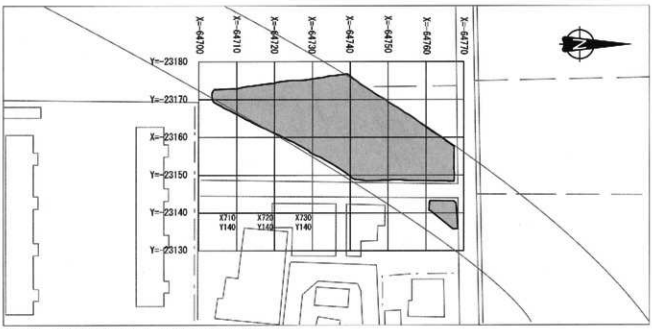
1　調査の方法

調査区におけるグリッドは、国土座標（世界測地系）を基準に設定を行い、院林遺跡５地区の位置する国土座標 X=64704、Y=-23136 ～ 23177 の下一ケタが０の位置を基準としてグリッドを設定した。X、Y の下３ケタをグリッド杭に記載しグリッド名とし、10 m間隔で打設した。また、10 m四方の１区画は、北西隅の杭をもってその区画名として、さらに２m毎に小グリッドを設定した（第３図）。

発掘調査は、範囲設定を終了後、監督員と調査員の立会いのもとで重機による表土掘削を行った。グリッド設置後、作業員が人力で包含層掘削を行った。遺構検出作業、検出写真撮影終了後に、1：200 で概略図の作成を行い、遺構番号をつけて、遺構半裁作業を開始した。調査員と補助員が手実測とトータルステーションを併用して 1:20 の上層図面作成を行い、土層確認、写真撮影を行った。各遺構の調査を終了後、完掘作業を行った。ラジコンヘリコプターによる図化用の空中撮影後に、調査・測量の補足を行った。監督員と調査員の立会いのもと調査完了確認を行い、重機による埋め戻しを行い、現地調査が終了した。

北東部三角形の調査範囲は、表土掘削後、黒色シルトの包含層を検出した。遺物は出土していない。黒色包含層を人力掘削後、遺構確認面と考えられる層で礫層を検出した。遺構、遺物が確認できなかったため、１m ほど礫層の掘削を行い地山の確認を行った。礫層は更に下に続き、遺物、遺構輪郭は確認できなった。調査区南側にある礫層の範囲と同じく、地山に相当する礫層と考えられたため、崩落の恐れもあることから、安全上掘削を中止した。この北東部の三角形調査範囲については、道路、用水路に近いことから、調査終了後に速やかに埋め戻しを行った。

発掘終了後、整理・報告書作成作業を開始した。出土遺物の洗浄・注記を行い、コンテナに仕分けした。遺物の接合・復元後、実測対象遺物の抽出を行い、実測・トレース、写真撮影を行い、図版作成を行った。遺構・遺物図面、遺構・遺物図版・写真図版の作成を並行して行った。



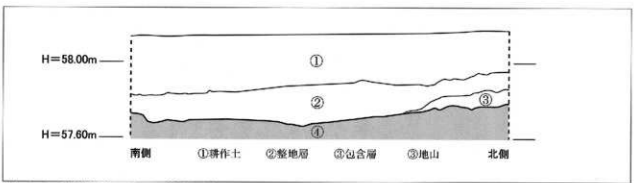
第３図　院林遺跡５地区　調査区割図　(1:1,000)

第４図　院林遺跡５地区　平面図　（S＝1：200）

2　院林遺跡５地区の概要

（１）地形と基本層序（第５図、写真図版１）

院林遺跡は、山田川と旅川に挟まれた河岸段丘上に立地している。５地区の表土掘削前の平均標高は58.5ｍである。遺構検出面に至るまでの層序は、①耕作土（10YR3/1 黒褐色シルト）、②整地層（10YR3/3 暗褐色シルト）、④遺構検出面（地山）である。部分的に③包含層（10YR2/1 黒色シルト）が見られた。調査区南部分は、戦後の県営ほ場整備事業実施時に削平を受けたと考えられ、表土掘削後には地山が検出できる状況であった。



第５図　院林遺跡５地区の基本層序

（２）遺構の概要（第７～12図、写真図版２～５）

院林遺跡５地区では、掘立柱建物３棟、溝５条、土坑４基を検出した。

SB01（第７図　写真図版２）

調査区中央部の西部分、X738～749・Y162～170で検出した。南北方向に主軸を持つ南北３間、東西２間の総柱の掘立柱建物である。床面積は約45㎡、主軸は北から５°西に振っている。柱間は南北が約3.0ｍ、東西が約2.5ｍである。柱穴の平面形状は、径0.3～0.4ｍの円形で、遺構検出面からの深さは0.3～0.5ｍである。Ｐ２・４・５・８・９・12は柱痕の痕跡と考えられる土層が確認できた。黒褐色シルトに地山がブロック状に混ざる埋土に、Ｐ５・８・９・12は黒褐色シルトが柱痕の輪郭として残り、Ｐ２には地山が混ざる。Ｐ４は褐灰色シルトが柱跡に残る。SD03・04を跨ぐ状況で検出していることからSD03・04の掘削時期と異なる時代に建てられていると推測できる。遺物は出土していないため、時期は不明であるが、他地区の院林遺跡の建物跡方向から推測して中世以降の建物の可能性が高い。

SB02（第８図　写真図版３）

調査区中央部の東部分、X734～741・Y165～172で検出した。南北方向に主軸を持つ南北２間、東西２間の掘立柱建物である。床面積は約23㎡、主軸は北から９°西に振っている。柱間は南北約2.5ｍ、東西が約2.3ｍである。柱穴の平面形状は、径0.4～0.5ｍの比較的規模の大きな円形で、遺構検出面からの深さは0.5～0.8ｍである。埋土は黒褐色シルトに地山がブロック状・粒状に混ざり、柱痕の痕跡は見られず、短期間で埋没したと考えられる。遺物は出土していないため、時期は不明である。SB01と部分的に重なるが、柱穴の切り合いが認められないため、前後関係は不明である。

SB03（第９図　写真図版４）

調査区中央部の東側、X732～737・Y152～160で検出した。東西方向に主軸を持つ南北１間、東西２間以上の掘立柱建物で、調査区外へと続く。方位は北から85°東に振っている。柱間は南北が約3.4ｍ、東西が約1.5ｍである。柱穴の平面形状は、径0.6ｍ～0.7ｍの円形で、遺構検出面からの深さは0.1～0.2ｍと比較的浅く、上面は削平されたと考えられる。暗褐色・黒褐色シルトに地山が粒状に混ざる埋土で、柱痕は見られない。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

SD01・05（第10図　写真図版5）

調査区北部分、X757～762・Y148～164で検出した。東西方向に延びる溝である。幅が2.8～3.3m、深さは約1.2mである。溝の中間に、浅く掘り残した部分を確認でき、土橋の可能性が考えられる。土橋状部分の長さは3.35m、上面の幅が2.3m、底幅約1.7m、上面から底面までの深さは約0.7mである。また、土橋状部分を境にして、東部分は逆台形に掘り込まれているが、西部分は弓形の掘り込みになっている。土橋状部分から東に向かって、SD01のほぼ中心に沿って、溝と考えられるSD05がある。幅が0.4～0.9mで、SD05は土橋部分から東側壁面まで続いており、東側断面図にもSD05の掘り込みが確認できた。反対に西壁の断面からは、SD05の掘り込みは見られなかった。また、土層断面からSD01が3回ほどの埋没過程を経て、SD05を掘削していると推測できる。④層以下では遺物は出土しておらず、①・⑧層からは土師器、須恵器の磨耗した小片が出土している。SD05が掘削される時期の前段階から遺物が混入していると考えられる。SD01から、9世紀代の流れ込みと考えられる遺物が出土している。古代以降の区画溝の可能性が考えられるが、明確な時期は不明である。

SD02（第10図　写真図版5）

調査区北部分でSD01に平行しており、X757～762・Y148～166に位置する。東西に延びる溝である。幅が0.6～0.8m、深さは平均0.25mで他の3条の溝と比較すると規模が小さい。断面は逆台形に近く、底面は平坦に掘り込んでいる。土師器、須恵器の小片が数点出土している。

SD03（第11図　写真図版5）

調査区中央部の東側、X745～750・Y148～172に位置する。東西に延びる溝である。幅が1.5～1.9m、深さは平均0.8mで、断面は中央部から西側は逆台形に近い形状であるが、東側の形状は漏斗状に近く、底面が狭く掘り込まれている。④層に鉄分が多く含まれている。遺物は土師器、須恵器の小片が出土している。9世紀代の溝と考えられる。

SD04（第11図　写真図版5）

調査区中央部東側でSD03に平行しており、X754～757・Y148～166に位置する。北に隣接するSD03と並行して東西に延びる溝である。幅は0.6～1.1m、深さは平均0.4mの溝である。断面形状は逆台形に近いが、底面が狭く掘り込まれている。SD03同様に、底面部分の②・③層に鉄分が多く含まれる。遺物は出土していない。

SX23（第10図）

調査区北側、X760～764・Y154～160に位置する。平面形は楕円形で、深さは0.3mの土坑である。埋土は黒色包含層起源であると考えられ、SD01に切られており、SD01より古い時期のものと考えられる。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

SX36（第10図）

調査区北側、X756・Y164に位置する。平面形は楕円形で、深さは0.2mの土坑である。埋土はSX23と同様に、黒色包含層起源であると考えられる。SD02に切られている。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

SX120（第12図　写真図版4）

調査区中央部の東側、X726～731・Y160～165で検出した。輪郭は円形に近く、直径は約4.5m、深さは約2.0mである。掘り込みの輪郭が明瞭であり、断面からは土層輪郭が確認でき、風倒木に見られる黒色包含層の流れ込みが見られないため、性格不明ではあるが遺構の可能性が考えられる。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器の破片、打製石斧等である。縄文土器の多くは①層から出土している。縄文中期～弥生前期と考えられる土器片が多く出土した。②層底面付近で磨耗した縄文土器片、⑤層上部で24の横刃形石器と考えられる石器

が出土している。遺物の多くは包含層直下に集中していることから、流れ込んだものと考えられる

SK160（第12図　写真図版4）

調査区中央部の西側、X732・Y170で検出した遺構である。直径が1.25mの円形である。深さが0.25mで、断面形状は逆台形である。遺物は出土していない。埋土は包含層起源の黒色を主としている。時期は不明である。

（3）遺物の概要（第13～14図、写真図版6～7）

SD01・05（第13図　写真図版6）

約80点の遺物が出土しており、須恵器4点、黒色土器3点、残りは土師器である。①・⑧層からの出土で、流水の影響を受けて磨耗している。1は土師器・皿である。口縁部が外反し短く平たい。9世紀代と考えられる。2は土師器・椀で高台を貼り付けたものである。3は土師器・甕の口縁部である。4は土師器・椀である。赤彩の痕跡が内外面に見られる。5は黒色土器・椀である。内面はミガキが施されている。6は須恵器で長頸壺の胴部片と考えられる。

SD02（第13図　写真図版6）

土師器、須恵器の小片各1点が出土している。25は土師器・皿である。平たく口縁部が外反している。

SD03（第13図　写真図版6）

約120点の土器片が出土している。須恵器6点、黒色土器3点、残りは土師器である。東壁付近に集中して出土している。8は黒色土器・椀である。口縁部が外反している。9～14は土師器・椀である。9は体部が緩やかに内湾している。10は②層中から東壁付近で一括して出土している。11は底部から斜上に伸び、口縁部で緩やかに内湾する。9世紀後半と考えられる。12～14は底部が未調整の糸切りである。15・16は須恵器である。15は杯で胴部から口縁部に直線的に斜めに伸びる。16は有高台の杯の底部である。

SX120（第14図　写真図版7）

縄文・弥生土器片が約210点、石器3点が出土している。17・18は浅鉢の口縁部である。焼成は良いが、胎土に小石を多く含む、連孤文と沈線を施している。20は深鉢の口縁部の破片であると考えられる。斜位の条痕文を施した後、平行沈線4条を横方向に施している。縄文晩期末葉～弥生前期と考えられる。20は浅鉢の底部である。底部の径が5cmと小さい。21は深鉢である。口縁部は横位、胴部から底部にかけて斜位の条痕を施している。縄文中期～晩期と考える。条痕文の土器片は多く出土しており、無文の土器片も見られる。22は①層中で出土した打製石斧の基部の破片である。石材は凝灰岩で、両面に自然面を残していることから、小礫を素材として加工している。23は①層からで出土した打製石斧である。石材はヒン岩で、横長剥片を素材とするバチ型の石鍬である。基部は凹型である。刃部には使用時の磨耗が見られる。24は⑤層の上部で出土している。礫に打撃を与えて割った剥片で、石材は砂岩である。打製石斧の素材となる剥片である。鋭利な縁辺部には、肉眼では擦痕や磨耗は見られないが、横刃形石器の可能性も考えられる。

Ⅳ　まとめ

・院林遺跡５地区では、掘立柱建物３棟、溝５条、土坑４基、柱穴が約 150 基検出した。多くの柱穴については、規模、規則性に特徴は見られなかった。出土した遺物は SD01･05、SD03、SX120 で出土点数の９割を占め、遺物が出土する遺構が偏っていた。溝から出土した遺物は、状態の悪い磨耗した小片が多かった。

・掘立柱建物は、SB01 ～ 03 の３棟を確認したが、いずれも主軸、柱穴の規模や形態も違う。SB01 は総柱の掘立柱建物であるが、総柱の掘立柱建物は３地区でも検出している。主軸はほぼ北を向いており、今回確認した SB01 もほぼ同じである。規模も類似しており、中世以降の建物の可能性が高いと考えられる。２地区で SB02 と規模の類似した古代の掘立柱建物を検出しており、近い時期の可能性も否定はできない。

・SD01 は、区画溝と考えられ、溝の中間部分には土橋状の浅い部分が確認できた。３地区で、方向が東西軸で規模も似ている溝（SD01）を検出しているが、遺物の出土量、遺物に年代の違いがあるため、関連性があるのかは不明である。SD02 ～ 04 もほぼ同じ方向を向いており、区画溝と推測される。SD03 からは９世紀後半頃と考えられる遺物が出土していることから、９世紀代の溝と考えられる。

・SX120 からは、上部の包含層付近では、条痕文土器、無文土器を中心とした縄文中期～晩期の土器の破片が出土した。また縄文晩期末葉～弥生前期と考えられる土器の破片も出土しているが、いずれも流れ込みと考えられる 24 の横刃形石器と考えられる遺物も出土している。SX120 は縄文中期以降と推測できるが、当該期の遺構は、今回の調査では他に確認しておらず、SX120 から遺跡の性格を述べるのは難しい。院林周辺でも古代以前の遺跡は存在していたと考えられるが、後世の削平・破壊が進んでいると考えられる。

・掘立柱建物跡、区画溝を確認したが、遺物資料に乏しいため、各遺構の明確な時期確定は難しい。他調査地区の主な遺構（第６図）を見ると、古代から中世以降にかけての区画溝が多く、５地区も古代、中世集落の一部であることは推測できる。遺物の出土量が少なく、SB01 ～ 03 の遺構を境に、南に行くにつれて遺構密度が減ることから、集落の中心から縁辺部であった可能性もある。

参考・引用文献

大島町教育委員会　1995　『北高木遺跡発掘調査報告書』

財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所　1996　『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告』

富山県埋蔵文化財センター　1996　『任海宮田遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1997　『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

財団法人石川県埋蔵文化財センター　2001　『松任市　乾遺跡発掘調査報告書』

富山県市教育委員会　2002　『富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告書』

内田亜紀子　2003　「富山県の黒色土器（２）」『富山考古学研究第６号』

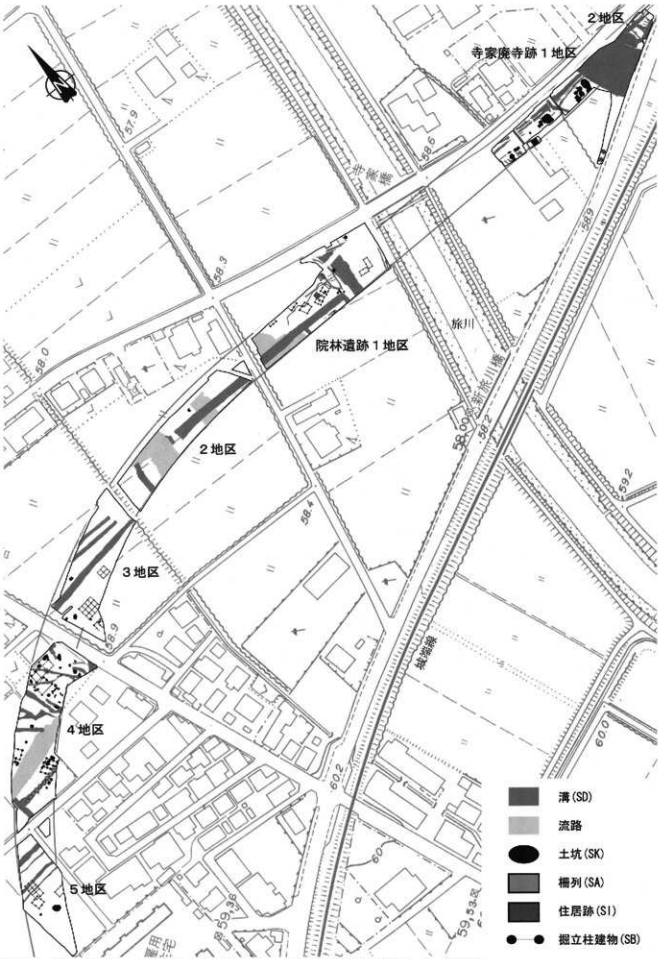
池野　正男　2003　「越中における古代前半代の土師器食器について」『北陸古代土器研究第 10 号』北陸古代土器研究会

財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所　2006　『下老子笹川遺跡発掘調査報告』

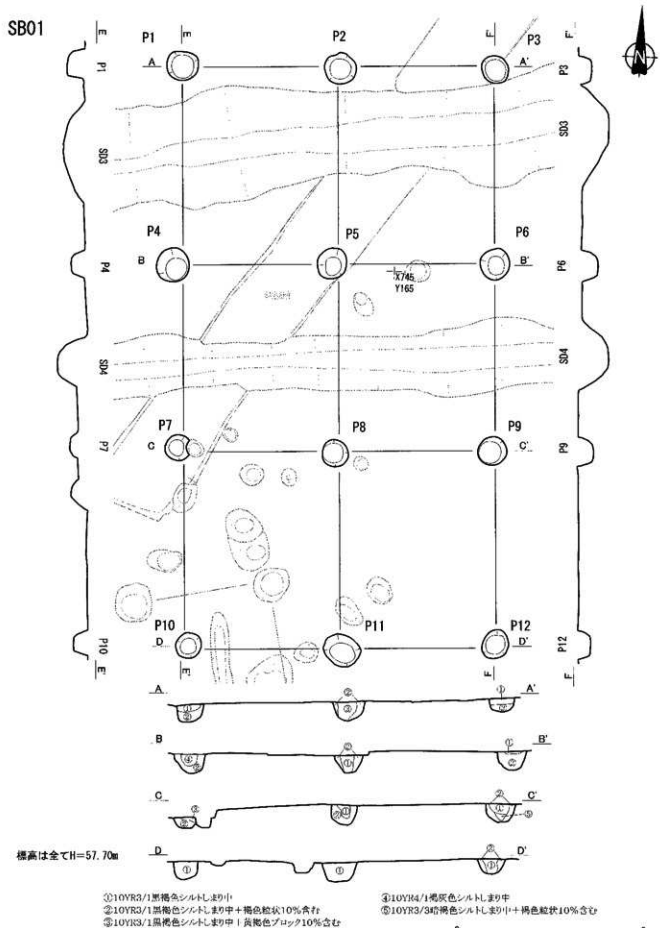
射水市教育委員会　2007　『高島Ａ遺跡発掘調査報告』

南砺市教育委員会　2007　『南砺市埋蔵文化財調査報告書 21　院林遺跡Ⅰ』

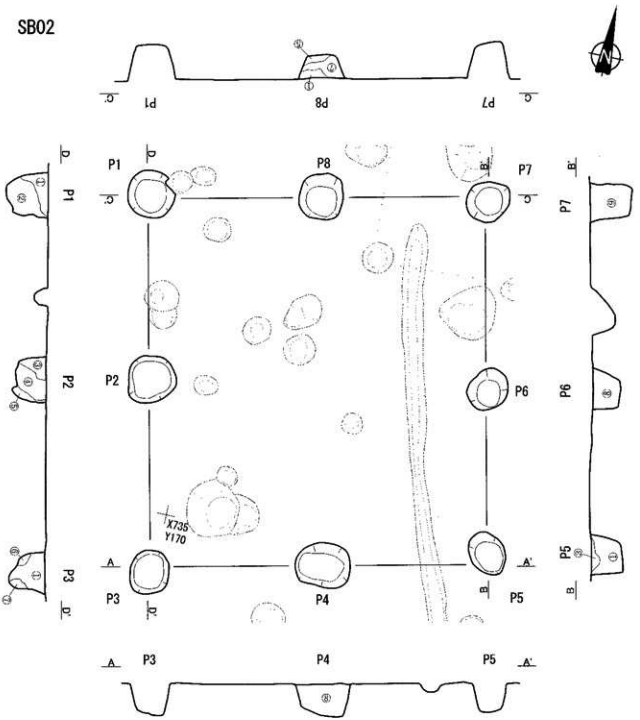
南砺市教育委員会　2008　『南砺市埋蔵文化財調査報告書 23　荒林遺跡Ⅱ　寺家廃寺跡Ⅰ』



第６図　院林遺跡１～５地区・寺家廃寺跡１・２地区の主な遺構（S＝1：2,000）



第7図　院林遺跡5地区の遺構(1)　SB01　遺構平・断面図(S＝1:60)

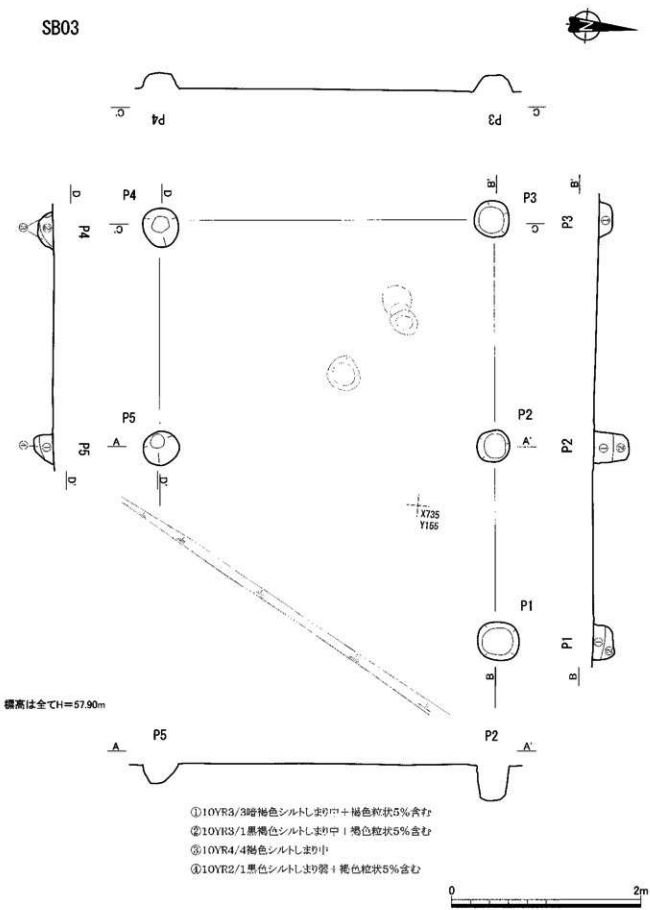


標高は全てH＝57.80m

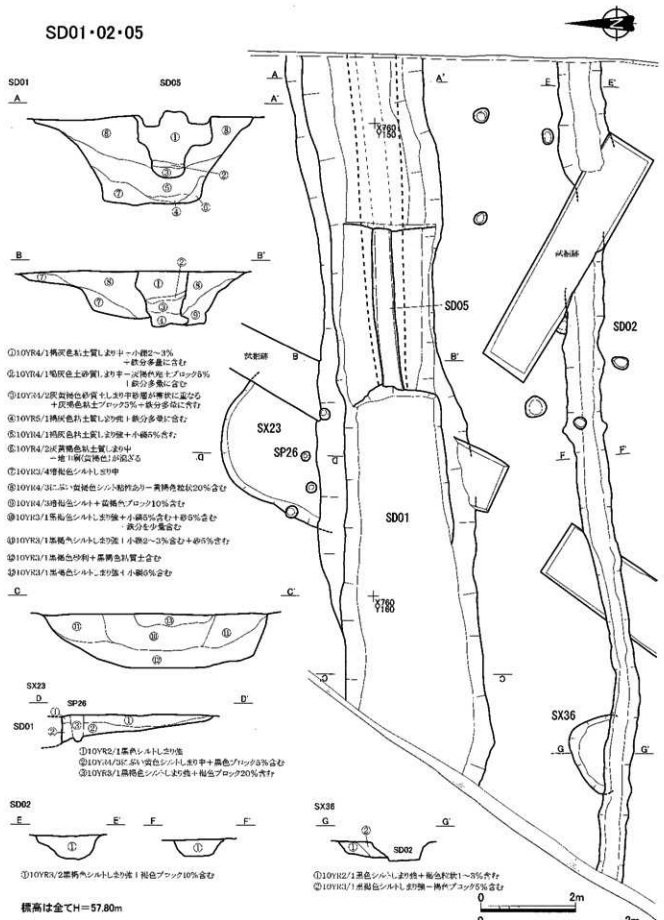
①10YR3/1黒褐色シルトしまり中＋褐色ブロック20%＋黒色ブロック1～2%含む
②10YR3/1黒褐色シルトしまり中＋褐色粒状1～2%含む
③10YR3/1黒褐色シルトしまり中
④10YR3/1黒褐色シルトしまり中＋褐色ブロック20%＋黒色粒状5%含む
⑤10YR3/3暗褐色シルトしまり中＋黒色粒状1～2%含む
⑥10YR3/2黒褐色シルトしまり中＋黒色ブロック5%含む
⑦10YR2/1黒色シルトしまり中＋褐色ブロック10%含む
⑧10YR3/1黒褐色シルトしまり中＋褐色粒状5%＋黒色粒状5%＋鉄分少量含む
⑨10YR3/2黒褐色シルトしまり中＋褐色ブロック10%含む

0　2m

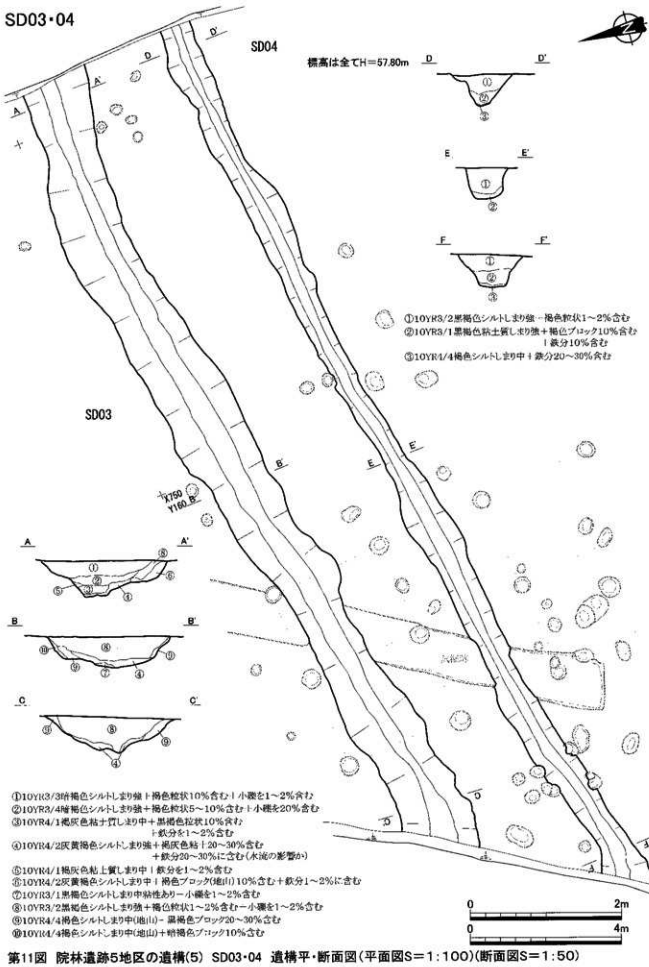
第8図　院林遺跡5地区の遺構(2)　SB02　遺構平・断面図(S＝1：50)



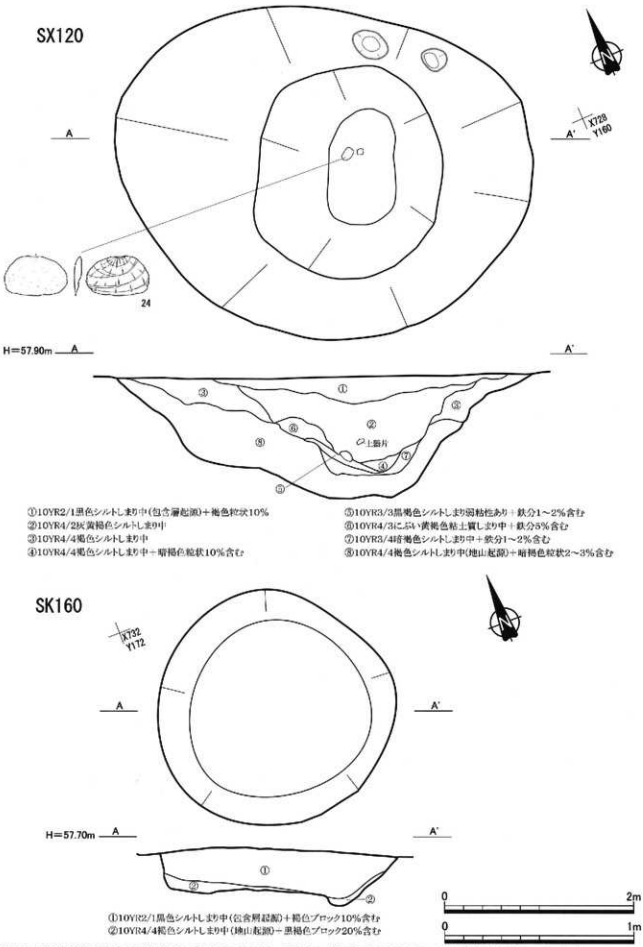
第9図　院林遺跡5地区の遺構(3)　SB03　遺構平・断面図(S＝1：40)



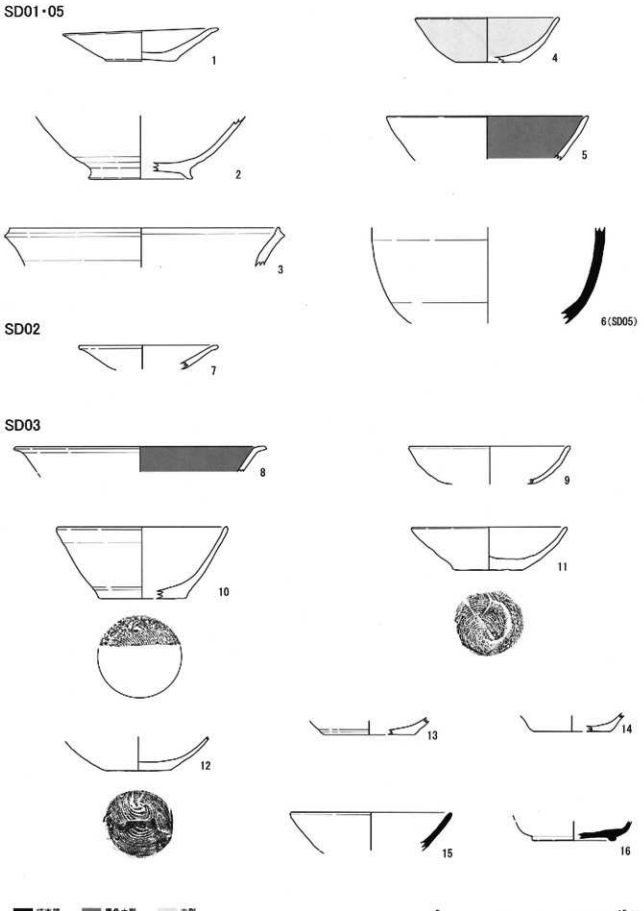
第10図　院林遺跡5地区の遺構(4)　SD01・02・05　遺構平・断面図(平面図S＝1：80)(断面図S＝1：50)



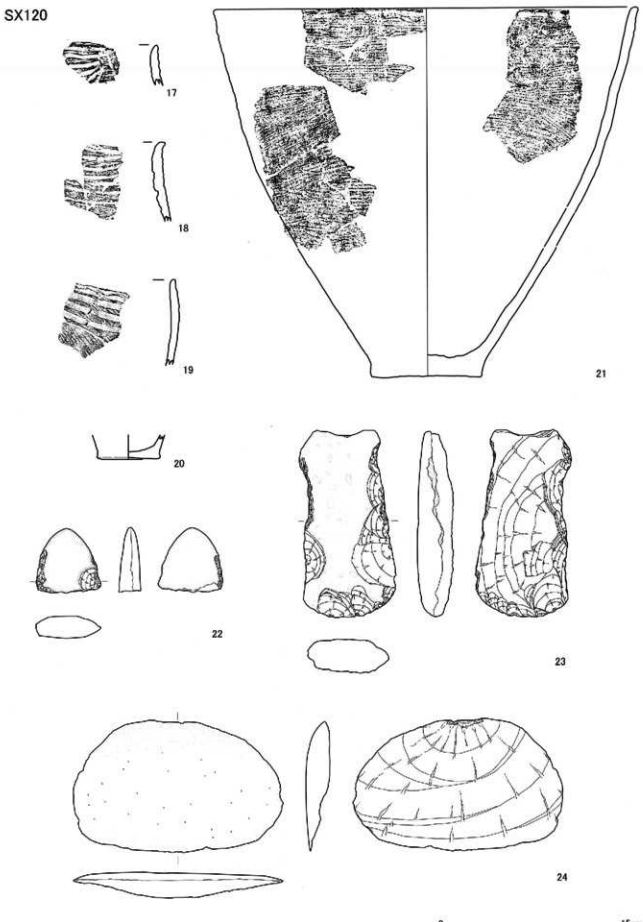
第11図　院林遺跡5地区の遺構(5)　SD03・04　遺構平・断面図(平面図S＝1：100)(断面図S＝1：50)



第12図　院林遺跡5地区の遺構(6)　SX120・SK160　遺構平・断面図(SX120 S＝1：40)(SK160 S＝1：20)



第13図 院林遺跡5地区の遺物(1) (S=1:3)



第14図　院林遺跡5地区の遺物(2)（S＝1：3）

第２表　院林遺跡５地区　掘立柱建物(SB)計測表

遺構番号	柱穴番号	座標 X	座標 Y	形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	規模	備考	図版
SB01	SB01-P1	750	170	円形	0.51	0.50	0.27	長軸　9m		第7図
	SB01-P2	750	170	円形	0.52	0.50	0.29	短軸　5m		
	SB01-P3	750	170	円形	0.51	0.40	0.21	柱間　2間×3間		
	SB01-P4	750	170	円形	0.60	0.50	0.31	面積　45㎡		
	SB01-P5	750	170	円形	0.53	0.50	0.27	方位　N-5°-W		
	SB01-P6	750	170	円形	0.51	0.50	0.29			
	SB01-P7	750	170	円形	0.40	(0.30)	0.16			
	SB01-P8	750	170	円形	0.50	0.44	0.32			
	SB01-P9	750	170	円形	0.54	0.49	0.30			
	SB01-P10	740	170	円形	0.40	0.40	0.29			
	SB01-P11	740	170	円形	0.63	0.51	0.29			
	SB01-P12	740	170	円形	0.50	0.40	0.23			
SB02	SB02-P1	740	180	円形	0.73	(0.60)	0.55	長軸　5m		第8図
	SB02-P2	740	180	円形	0.70	0.60	0.45	短軸　4.6m		
	SB02-P3	740	180	円形	0.61	0.50	0.48	柱間　2間×2間		
	SB02-P4	740	170	円形	0.70	0.60	0.43	面積　23㎡		
	SB02-P5	740	170	円形	0.60	0.52	0.41	方位　N-9°-W		
	SB02-P6	740	170	円形	0.60	0.57	0.36			
	SB02-P7	740	170	円形	0.62	0.50	0.55			
	SB02-P8	740	170	円形	0.63	0.60	0.28			
SB03	SB03-P1	740	160	円形	0.50	0.40	0.24	長軸　3.4m		第9図
	SB03-P2	740	160	円形	0.32	0.30	0.37	短軸　(3.0m)		
	SB03-P3	740	160	円形	0.40	0.40	0.14	柱間　1間×(2間)	調査区外につづく	
	SB03-P4	740	160	円形	0.40	0.40	0.16	面積		
	SB03-P5	740	160	円形	0.41	0.40	0.20	方位　N-85°-W		

第３表　院林遺跡５地区　溝(SD)計測表

遺構番号	座標 X	座標 Y	長軸 (m)	最大幅 (m)	深さ (m)	方向	備考	遺物	図版
SD01	760～770	150～170	14.80	3.10	1.20	N-87°-W	土橋状部分あり	第13図	第10図
SD02	760	150～170	17.60	0.80	0.25	N-88°-W			
SD03	750	150～180	22.60	1.90	0.80	N-84°-W			第11図
SD04	750	150～180	25.70	1.10	0.40	N-87°-W		なし	
SD05	760～770	150～160	7.10	0.88	0.81	N-87°-W	SD01内	第13図	第10図
SD195	740	170	9.70	0.30	0.90	N-13°-E		なし	第4図
SD196	740	170	2.40	0.40	0.10	N-14°-E		なし	
SD197	740	180	4.80	0.30	0.15	N-13°-E		なし	
SD198	740	180	2.00	0.30	0.08	N-15°-E		なし	
SD199	740	180	2.00	0.40	0.08	N-15°-E		なし	
SD200	730	180	2.50	0.30	0.06	N-14°-E		なし	

第４表　院林遺跡５地区　土坑(SK・SX)計測表

遺構番号	座標 X	座標 Y	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考	遺物	図版
SX23	770	160	2.10	(2.00)	0.33	SD01に切られる	なし	第10図
SX36	760	170	1.80	(0.80)	0.25	SD02に切られる	なし	
SX120	730	170	4.50	3.40	1.26		第14図	第12図
SK160	740	180	1.30	1.30	0.32		なし	

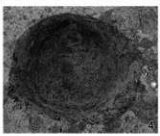
第５表　院林遺跡５地区　土器計測表

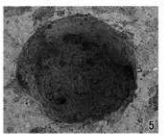
番号	遺構名	分類	器種名	法量(cm)（ ）は反転復元及び残存高 口径	底径	器高	その他	色調 内面	色調 外面	残存率（口縁）	残存率（底部）	備考	図版
1	SD01	土師器	皿	(16.3)	－	(2.6)		10YR8/4 浅黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	3/12	10/12		
2	SD01	土師器	高台椀	－	(8.2)	(5.0)		5YR6/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色	－	4/12		
3	SD01	土師器	壺	(22.6)	－	(3.1)		10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR74/1 褐灰色	1/12	－		
4	SD01	土師器	椀	(11.4)	(2.5)	(3.5)		10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	1/12以下	4/12	赤彩あり	
5	SD01	黒色土器	椀	(15.9)	－	(3.5)		10YR2/1 黒色	10YR8/2 灰白色	1/12	－		
6	SD05	須恵器	長頸壺	－	－	(7.6)		10YR3/1 黒褐色	N51 灰色	－	－		
7	SD02	土師器	皿	(22.10)	(1.9)	－		7.5YR7/2 明褐灰色	7.5YR7/2 明褐灰色	1/12	－		
8	SD03	黒色土器	椀	(20.0)	－	(2.0)		N2/ 黒色	10YR7/4 にぶい黄橙色	1/12以下	－		
9	SD03	土師器	椀	(12.6)	－	(3.0)		7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR8/3 浅黄橙色	1/12	－		第13図
10	SD03	土師器	椀	(13.4)	(7.0)	(5.7)		10YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/8 黄橙色	4/12	4/12		
11	SD03	土師器	椀	(12.4)	(5.4)	(3.4)		10YR7/2 にぶい黄橙色	2.5Y7/3 浅黄色	3/12	完形		
12	SD03	土師器	椀	－	(5.2)	(2.7)		7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	－	11/12		
13	SD03	土師器	椀	－	(1.4)	(7.2)		5YR4/6 明赤褐色	5YR4/6 明赤褐色	－	2/12		
14	SD03	土師器	椀	－	(1.3)	(6.0)		7.5YR4/6 褐色	7.5YR4/6 褐色	－	2/12		
15	SD03	須恵器	杯	(12.6)	－	(3.0)		N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	2/12	－		
16	SD03	須恵器	高台杯	－	(5.8)	(1.5)		10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	－	5/12		
17	SX120	縄文土器	浅鉢	－	－	(3.1)		5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	1/12以下	－		
18	SX120	縄文土器	浅鉢	－	－	(6.3)		5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	1/12以下	－		
19	SX120	弥生土器	浅鉢	－	－	(6.8)		10YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	1/12	－		第14図
21	SX120	縄文土器	深鉢	28.1	8.2	26.3		10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/6 黄褐色	4/12	完形	煤付着	
20	SX120	縄文土器	浅鉢	－	(5.0)	(1.9)		6YR6/4 にぶい黄橙色	5YR5/6 明赤褐色	－	6/12		

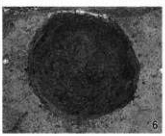
第６表　院林遺跡５地区　石器計測表

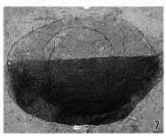
番号	遺構名	分類	器種名	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	最小幅 (cm)	形態	石材	残存率	備考	図版
22	SX120	石器	打製石斧	(5.2)	5.1	1.8		不明	凝灰岩	20～30%		
23	SX120	石器	打製石斧	14.5	7.7	2.3	6.1	バチ形	ヒン岩	100%	横長剥片	第14図
24	SX120	石器	横刃形石器	16.6	10.3	2.0			砂岩	100%		

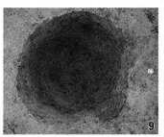
1　院林遺跡５地区全景（南から）
2　遺構検出状況（北から）
3　遺構検出状況（南から）
4　北東調査区完掘（西から）
5　北東調査区基本層序（西から）
6　北西部分基本層序（東から）
7　南東部分基本層序（西から）

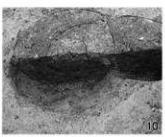


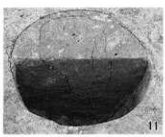


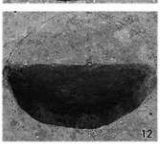


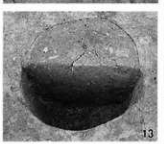


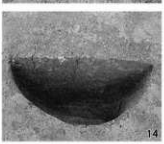


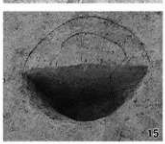




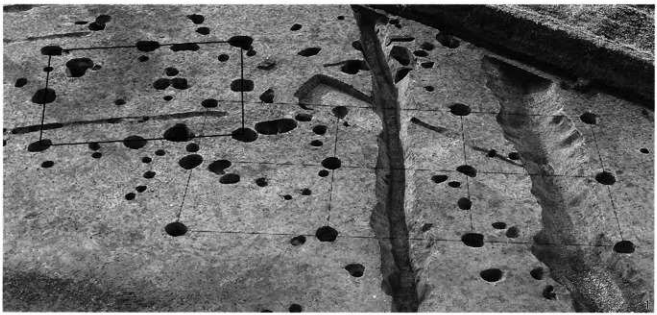


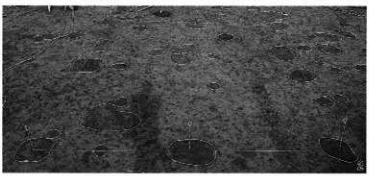


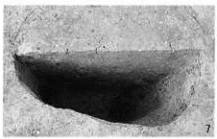


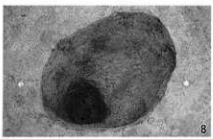


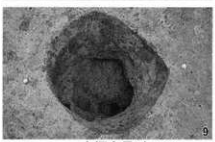
1 SB01完掘全景(東から)
2 SB01検出全景(南から)
3 SB01完掘全景(北から)
4 SB01-P1完掘(北から)
5 SB01-P2完掘(北から)
6 SB01-P3完掘(北から)
7 SB01-P4土層(南から)
8 SB01-P5土層(南から)
9 SB01-P6完掘(南から)
10 SB01-P7土層(南から)
11 SB01-P8土層(南から)
12 SB01-P9土層(南から)
13 SB01-P10土層(南から)
14 SB01-P11土層(南から)
13 SB01-P12土層(南から)

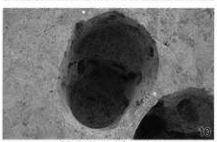


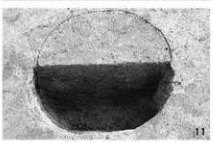






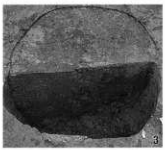
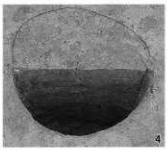
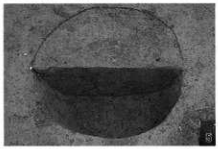
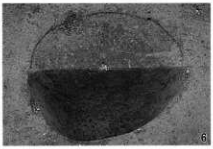
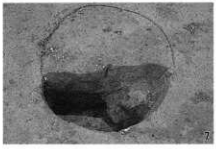






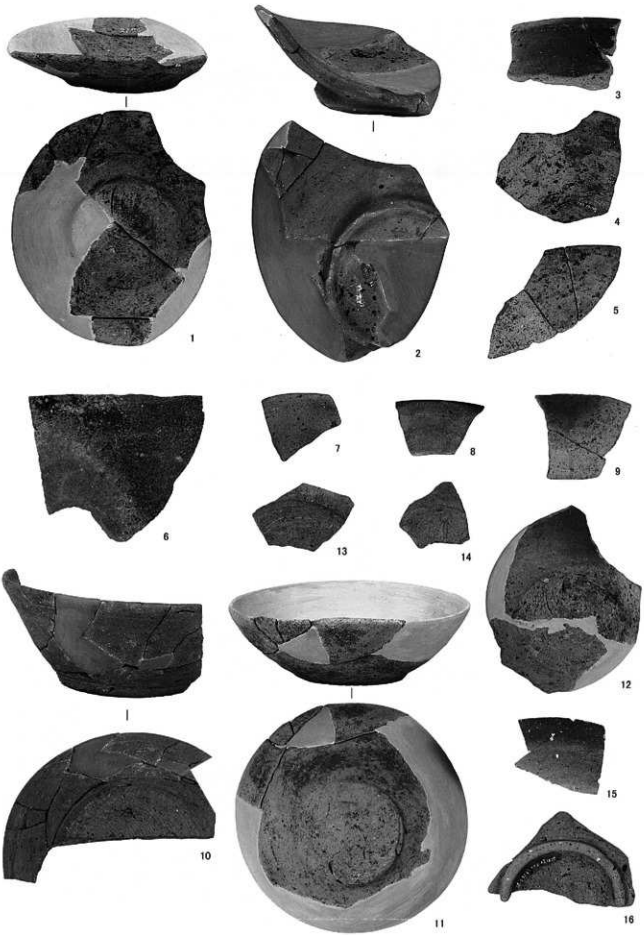
1 SB01・02完掘全景(東から)
2 SB02検出状況(南から)
3 SB02完掘全景(南から)
4 SB02-P1完掘(西南から)
5 SB02-P2土層(西から)
6 SB02-P3土層(西から)
7 SB02-P4土層(南から)
8 SB02-P5完掘(東から)
9 SB02-P6完掘(東から)
10 SB02-P7完掘(東北から)
11 SB02-P8土層(南から)

写真図版4

1 SB03完掘全景(東から)
2 SB03完掘全景(西から)
3 SB03-P1土層(北から)
4 SB03-P2土層(北から)
5 SB03-P3土層(北から)
6 SB03-P4土層(南から)
7 SB03-P5土層(南から)
8 SK160完掘(南から)
9 SX120完掘(南から)
10 SX120土層(南から)
11 SX120遺物出土状況(南東から)

1 SD01～05完掘全景(西北から)
2 SD01・02完掘(東から)
3 SD03・04完掘(東から)
4 SD01・05東端土層(西から)
5 SD01土橋状部分土層(西から)
6 SD01土橋状部分(東南から)
7 SD01・05土橋状部分(東南から)
8 SD02土層(西から)
9 SD04土層(西から)
10 SD03土層(西から)
11 SD03遺物出土状況(南から)
12 SD03東端土層(西から)



1～5(SD01)　6(SD05)　7(SD02)　8～16(SD03)　(S＝1：2)

SX120　(S=1:2)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとし いんばやしいせきよん
書名	富山県南砺市 院林遺跡Ⅳ
副書名	主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(4)
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書26
編著者名	片田亜紀　阿部将樹
編集機関	株式会社アーキジオ
発行機関	南砺市教育委員会
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波(とやまけんなんとしいなみ) 520 TEL0763-23-2014
発行年月日	西暦2009年3月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いんばやし 院林	とやまけんなんとし 富山県南砺市 いんばやし 院林	16210	244	36度34分 57秒	136度54分 41秒	081010 ～ 081209	1,155㎡	主要地方道砺波福光線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
院林遺跡	集落	縄文・古代・中世	掘立柱　建物、土坑、柱穴、大溝、溝	縄文土器、弥生土器、石器、須恵器、土師器	

富山県南砺市院林遺跡Ⅳ

主要地方道砺波福光線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(4)

平成21年3月12日
編集　株式会社アーキジオ
発行　南砺市教育委員会
印刷　株式会社セピアス